

\* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、執筆者の意図と一致しているかどうかは不明です。

0. 福永自身のコメント

No.	タイトル	資料	初出年/月	要旨
0	初出	福永武彦全集第6巻		初出「文学界」1959年4月号 単行 1.「世界の終り」初版に収む。1959年6月人文書院刊。 2.「世界の終り」新版に収む。1969年9月人文書院刊。 3.「夢見る少年と昼と夜」新潮文庫版に収む。1972年11月刊。
1	短篇集「世界の終り」 初版後記	短篇集「世界の終り」	1959年5月	(引用) 僕の「世界の終り」は批評家からあれこれ言はれ、大いに誤解された面もある。しかし考へかたが違ふのだからそれもしかたがない。この頃、小説を書けば書くほど孤立感が僕を襲ふ。一體誰が分ってくれるのだらうと考へることがある。(中略) 僕が決して技巧上の実験のためにのみ、批評家を眩惑させるためにのみ、小説を書いてゐるのではなく、心の奥底に人すべての持つ深淵を持ち、それを常に覗き見ながら、この無意識なものを虚構の世界に写し取らうと努力してゐることを、読者は、僕の愛する読者は、理解してくれるだらうか。
2	短篇集「世界の終り」 再版後記	短篇集「世界の終り」	1969年7月	初版の後記で悲しげなことを言っているが、あれは批評家に対する犬の遠吠のやうなもので、作家には秘かに自負するところがあつたに違ひない。
3	病者の心	「保健同人」1952年7月号 随筆集「別れの歌」に再録	1952年7月	(引用) 分裂病患者は、ミンコフスキの巧みな言葉を借りれば、現実との生ける接触を失ったものである。彼は現実の世界から埋没して生きている。彼の深淵がいかに深く、その内部で時間がどのように停止しているかは、僕たちにはわからない。それは第三者にとって了解不能の世界である。
4	フロイトと私	人文書院版フロイト著作集第三巻月報 随筆集「書物の心」に再録	1969年12月	療養所生活における福永の経験に触れている。 (引用)ミンコフスキの謂わゆる「現実との生きた接触」が、療養生活を送っていると健常人の間にも突発的に消滅する場合があることなどを観察した。
5	福永武彦全小説 第3巻「序」	福永武彦全集第3巻	1973年11月	(引用) 療養所にいた頃に私が最も熱心に勉強したのは精神病理学である。(中略)私はミンコフスキの「精神分裂病」とか村上仁の「精神分裂病の心理」などという本を丁寧に読み、分からないところがあれば岡田さんに質問したりした。それは何も小説の材料にしようなどの魂胆があつたからではなく、病人というものは自分の病気の内容を窮めたくなるとともに、その病める肉体を所有している精神の内容をも、より一層窮めたくなるものだからである。私は人間というこの不思議なものに深く惹かれ、それは私を生へと導く原動力ともなっていた。
6	福永武彦全小説 第6巻「序」	福永武彦全集第6巻	1974年3月	(引用) この年の秋、私は胃を悪くして国立東京第一病院に入院し、二月半ばかり寝ていた。せつかく結核が癒つたと思つたら無事平穩も僅か5年しかもたなくて、これからあとは胃病に悩まされることになった。そこで翌昭和34年2月に、やっとよくなった身体で無理をして書いたのが「世界の終り」である。まさに強迫観念的大気に充ち満ちていて、我ながら余裕に乏しいが、これは寝ていた間に私の不安感情が高まった結果だろうと思う。私はこの後二年おきとか三年おきとかに胃を悪くして病院に担ぎ込まれることになるが、退院後の第一作というのは、長い間病床で考えたあげくの仕事だから、大体に於いてひたむきな傾向があるが、この「世界の終り」ほどの暗い作品は以後書いていない。

7	「世界の終り」エビグラフ	ボードレール「散文詩草稿」より		<p>忘れられた過ちによる死刑宣告。恐怖の感情。僕は告発に対して文句を言わない。夢の中の説明の出来ない大きな過ち。</p> <p>本散文詩草稿についての福永のコメント(福永訳「パリの憂愁／ボードレール」解説的ノート(1965)より引用) これも亦、ボードレールの夢の、本質的な悲劇性を示している。即ち散文詩の基調をなすものは、詩人を取り巻く環境、即ちパリと、それを眺める詩人、即ち憂愁とであり、言い換えれば、知性によって裏打された夢＝現実と、悪夢によって暗く染められた知性＝主体とである。ボードレールは夢に逃れようとはしない。夢が現実よりも一層悪夢的である以上、彼は冷然と、諦念を以て、見詰めざるを得ない。</p>
8	「ボードレールの世界」	ボードレール詩三篇鑑賞	1947	<p>「夕べの階調」最終節)</p> <p>やさしく慕うこの心、果てしなく夜の虚無を憎むから、 きららかな過去の記憶を集め行く！ 陽は西に、自らの凍る血潮に沈み行き 君の想いはわが胸に聖体盒に似て冴えながら！</p> <p>(要約) 夕陽はボードレールにとって神秘的な感じを伴っていた。夕陽は、それによって照し出されたものに一種の霊的な効果を与えると言うことが出来る。 夕陽の持つこのような喚起力は『悪の華』の「旅への誘い」の最終節に見られる。</p> <p>沈む陽のもと、野と運河と、すべての街はあかねの色に、こがねに燃える。 世界は眠る、このあつい光のただ中に。</p> <p>(中略) 結論として、夕陽が喚起するものを羅列するならば、それは第一に霊的な美であり、第二に過去であり、第三に愛である。過去と愛とは結びついて、ボードレールにとっての母性的なもの、家庭的な団欒、そして女性のやさしさに及ぶ。第四は夕陽が沈んだすぐあとに控えている夜であり、その夜はまた逆に夕陽の美しさを、その時間的なはかなさを、強調する役割をも果たしている。</p>
9	「内的独白と時間構造」丸谷才一との対談	「全集・現代文学の発見月報」6 福永武彦対談集「小説の愉しみ」(1981)所収	1968年5月	<p>(引用) 福永：(「飛ぶ男」に対し)「世界の終り」はモノローグじゃなく、意識の中身をダイアログで書こうとした。そのほうがはるかに整頓が行き届いてリズム感が出ると思った。内的独白というのはリズムだと思うんですよ。リズム感が読者に伝わってこない、その人間が生きていてモノを考えているという感じが出ない。方法としては「飛ぶ男」はごくふつうで「世界の終り」みたいにダイアログを使ったほうが、自分としては冒険をしたという気がする。</p>

#### 1. 発表時評

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	要旨
1	文芸時評	山本健吉	読売新聞 1959年3月19日	1959年3月	<p>(引用) 作者特有のデリケートな筆致で、繊細に心理を追って行くが、なぜこのような病気の女が作者にとって意味を持つのか、かんじんのところが分からない。巧妙に仮構された心理というものに、私はさして興味を抱けないのだ。</p>
2	今月の小説ベスト3	平野謙	毎日新聞 1959年3月26日	1959年3月	<p>(引用) 今月の作品のなかで、ともかく作者が全責任を負って独自の作品世界を築きあげているものとしては「世界の終り」が第一等であった。ドッペルゲンゲルに悩まされる細君の異常な孤独感を中心として、その周囲に夫と母親を配した幻想的な物語である。ただ私としては、もっと無気味なナマナましい美が創造されていたら、と思わずにいられなかった。すこし手ギレイにまともすぎている。</p>

3	文芸時評	篠田一士	東京新聞 夕刊 1959年3月27日	1959年3月	(引用) 福永氏の「世界の終り」は精神異常の女性と女性の夫である医師との内的独白がちょうど美しい旋律を持ったバイオリンソナタのように二重奏を奏でる大変甘美な作品である。しかし、この二重奏はあまりにもバイオリンが単調な高音を鳴らし続けるために、アンサンブルがかなり乱れ、読者はしばしばとまどう。 それに作者がこの作品のなかに秘かに導入したゴシック・ロマンスの手法が堅牢な話法を喫入しようとする所期の目的から離れて、かえって下手な推理小説めいた白々しさを招来する結果になったのは残念である。
4	文芸時評	横井幸雄、 折目博子	「作家」 1959年5月1日	1959年5月	(引用) 文学青年の気負った、しかし陳腐な実験作というところか。秀才の作品は何故こんなに読みにくいのだろう。つらつら考えてみるに、何もそうむつかしいことをいっているわけでもなさそうなのに。いや内容は全くのメロドラマだ。それに、この「世界の終り」とは何の意味かもわからない。
5	総合合評	椎名麟三、 野間宏、 佐々木基一	「群像」1959年5月号	1959年5月	(要約) 椎名麟三：方法的にキチツとしていて、小説の方法論の教科書になる。 野間宏：第二の自分が見る内容をもっと深めないことには、もはや意味がなく、第二の自分と自分というものをただ設定して、それだけから見るといったら、もはや福永氏がやらなくても、そういうものはある。 佐々木基一：計算された構成にもかかわらず、多美が精神不安になる理由が、結局主人公もこれはわからないということで終ってしまっていて、詩の場合は、こういう言葉のイメージで描いていくことはいいけれど、散文はこれではまずい。

## 2. 研究紀要、単行本、その他

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	「世界の終り」解説	佐々木基一	集英社版 日本文学全集81	1968年		(引用) 従来の小説方法だと、狂気の細君をもった男の側の感情や思考をとおして、狂気の細君の奇体な言動が外側から描かれるのが普通であるが、福永武彦は、正気の人間の日常生活と、狂気の妻の異常な内面世界とを、それぞれ独立に、並行して描く。それによって、細君の狂気を、日常的世界のひとつの異常事として、現実の世界の空気によって包んでしまうかわりに、狂気の世界をひとつの独立した世界として日常に対置する。いや、むしろ狂気の世界こそ、じつは、わたしたちが(意識的、無意識的に)見ていることを拒んでいる生の実態だとして、わたしたちの目の前につきつけるのである。
2	福永武彦の風土に関する試論	源高根	「国文学」1972年11月号	1972年	7	(引用) 福永武彦氏は、昭和20年から22年まで帯広に住んで、北海道の厳しい冬を身をもって体験している。そして「心の中を流れる河」や「世界の終り」や未完の長篇「夢の輪」は、たしかに北海道を舞台とした小説である。しかしこれらの小説にえがかれているのは、いかなる現実の北海道でもない。福永氏がえがいたのは、福永氏が見た実際の北海道に幻視されたところの「北の外れの雪の国」である。これらの小説の中の都会が、寂代、彌果、と名づけられているのは、福永氏の内部の北方がいかなる風土であるかを象徴しているように、僕には思われる。
3	福永武彦における<暗黒意識>	清水徹	「国文学」1972年11月号	1972年	8	(引用) 『世界の終り』で、女主人公は最初に分裂症的症状を見せるとき、彼女が「私は遠いところへ行っていたのよ。寂代でもない弥果でもない、もっとずっと北の寂しい河のほとりだった」とつぶやく。冥府のレテの河がそうであるように、ふたつの世界をひきはなすものとしての<河>のイメージは、<暗黒意識>という観念によって呼ばれるべきなものかを具体的に提示するのである。こうして、内部に孕まれた<死>、孤独・挫折・絶望の源泉、錯乱・狂気の心的な場の三者を福永は<暗黒意識>の名の下に統一的に把握する。類同物をたどるようにて<暗黒意識>の範囲をひろげてゆくことによって、かれは、生を生きるときの心的状態をいわば逆光の下に浮かび上らせるような装置を手に入れるのである。言いかえれば、かれは、<暗黒意識>を裏箔とする鏡を磨き上げ、これに生の姿を映しだすことによって小説を創造してゆくのだ。

4	福永さんの中を流れる河	清水徹	福永武彦全小説 第4巻 月報	1974年	3	(引用) 二年半近くの間をへだてて発表されている「心の中を流れる河」と「世界の終り」は、じつは姉妹作ともいべき深い関係に結ばれているのである。まず第一に両者とも北海道の寂代および弥果というアレゴリックな名前を持つ都市を舞台にしている。第二に、なによりも、「世界の終り」の主人公である医師沢村駿太郎とその妻多美は、「心の中を流れる河」における鳥海太郎と妻梢ののちの姿にほかならない。じつは深い河にへだてられていた太郎と梢がもし結婚すればどうなるか、それを追究した作品が「世界の終り」だとも読めるのである。(中略) 短篇の末尾で彼女を待ち受けている運命はおそらく死であろう。彼女がその水音に耳を傾けずにいらなかった「河」、彼女と夫とのあいだに流れる「河」は、また、心の奥底にある深淵から流れ出した「河」、生と死とを限る「河」でもある。そういう河をいま彼女は渡ろうとしている。 ところで、「河」を渡りかけた多美が自分の分身と出逢うというのは、物語の表面では彼女の精神錯乱だが、それはじつは、自己を見失って浮遊している彼女の自己回復の小説的裏返しにほかならぬ。「河」を渡り、彼岸へと赴くことにより彼女は自分のアイデンティティを回復する。(中略)「河」の向こう岸とは、福永さんの根源的な主題である「妣の国」なのだ。「妣の国」におけるアイデンティティの回復、そういう意味での「死」が、福永さんの主人公たちの最大の希望なのである。
5	私読「世界の終り」 福永武彦への一視点	大森郁之助	札幌大教養部短大部紀 要10	1977年	14	(要約) 「世界の終り」と「心の中を流れる河」(1956)の対照を主とした考察 ・寂代は二作を通じて女主人公の実家あるいは姉の嫁ぎ先という、いわば彼女の〈根〉の所在地である。弥果は二作に共通して、女主人公の結婚生活が破綻を決定的にする舞台という性格をもつ。 ・「心の中を流れる河」と「世界の終り」の創作は、北海道での厳しい体験を経た福永の、文学化という形での体験克服のいとなみの面があったのではないか。 ・前掲した清水徹氏の『福永さんの中を流れる河』をの趣旨(二つの短篇のつながり)を引用している。
6	編年体・評伝福永武彦	源高根	「国文学」1980年7月号	1980年		(「昭和29年」より引用) 福永武彦が療養所時代に熱心に勉強した分野に、精神病理学があった。その適用はやがて「世界の終り」に到達する。「『世界の終り』は、僕が勉強して書いた作品だから」と聞いた記憶がある。
7	憂愁の詩学 ボードレールから福永武彦へ(2)	山田兼士	福永武彦研究アーカイヴ 「詩論」第六号(1984年10月)  「年報 福永武彦の世界第2号」(2011)に再録	1984年10月	7	(引用) ボードレールの遺した散文詩草稿の中には、「世界の終り」という題名と、おそらくその一部とみなされる二、三の断片が見られる。福永武彦が、ボードレールの書かれなかった作品を主題として『世界の終り』という短篇小説を完成したことは、周知の通りである。  (エピグラフについて)死刑宣告を受けた詩人は最早人間の世界(日常的現実)に住むことはできない。だが、それが「忘れられた過ち」によるものだとすれば、彼はいかんにして自らを償い得るだろうか。彼の存在自体が死刑宣告の原因なのである。ここには一種の原罪の観念が働いている。しかし、このように多分にカトリック的な原罪の意識を元に福永武彦が完成した世界は、実に東洋的な、自己消滅への願望の物語に他ならなかった。  「それ」は福永武彦の「暗黒意識」の究極を示す代名詞である。(中略)『世界の終り』は一層その「暗黒意識」を色濃くしつつ最後の長篇『死の島』への契機となるわけだが、そこに描かれる「世界」はやはり、〈死者の眼〉によって貫かれているといえよう。
8	「世界の終り」 —その日への収斂	小林一郎	文藝空間 第10号 総特集 福永武彦の「中期」	1996年	1	(引用) 「世界の終り」は、その日への収斂／カウント・ダウンを描き「彼女」「彼」「彼と彼女」「彼女(つづき)」の四章からなる小型の「死の島」だ。(中略) 内的独白の新境地が、ここにある。

9	福永武彦の分身小説群	渡邊正彦	近代文学の分身像 (1999) 角川選書	1999年		(引用) 日本で、福永の「世界の終り」ほど、精神を病んだ人間に分身が出現する機制や分身体験をその人間の内と外からの痛みと苦しみを共感できるように本格的に描いた作品は他にない。  しばしば分裂病の患者は、他者に自分の思考や感情を奪われ、乗っ取られ、命令されたりするという。その他者とは、自己の自己性が他者性に帰してしまっているということにほかならない。多美は、向こう側から出現した本当の自分－他者となった自己性に、この世界を乗っ取られてしまったのである。これが<世界の終り>である。
10	「世界の終り」論	上村周平	国語国文薩摩路46	2002年	19	(要約) ・ボードレールの「夕べの階調」の夕焼けが時間の経過に浸食されつつある記憶を呼び覚ましているのに対して、「世界の終り」において夕焼けが呼び覚ましているのは、ムンクの「叫び」にあるような多美の浸食を受けつつある心なのである。(引用) ・福永が療養所で読んだミンコフスキー「精神分裂病」他の精神病理学書を参照しながら、多美の精神の病が「生きられる距離」を浸食されること、そして浸食ということがボードレールにおける夕焼けのイメージと結びつき、それが多美の発狂から死へ至る過程にも見出されること、さらに作中で描かれている世界没落の様相について検討を加えている。 ・渡邊正彦「福永武彦の分身小説群」(『近代文学の分身像』(1999)よりの引用(資料2-9参照)) ・冒頭に掲げられたエピグラフにおける“悪夢”について、福永が読んだフロイト、ヤスパース他の著作を参照しつつ検討を加え、それが多美の死の世界、殺意に満ちた没落世界とともに、「死の欲動」へも通じていると考察している。 ・「死の島」の構想は「世界の終り」よりも早い昭和20年代後半から始まっている。「世界の終り」における多美の没落世界は「生きられる距離」を失って死相を帯びた世界として立ち現れるが、それと同様のことが萌木素子にも見い出せる。
11	福永武彦「世界の終り」論 －「現代の悲劇性」への眼差し－	飯島洋	日本近代文学 94	2016年	15	(要約) ・ボードレールにおける「二重人」は、現実の生を生きながらもそれを否定的にしか感受することができず、現実とは別個の論理をもった世界を夢想する。こうした生に対する二重の態度の背反が、現実生活を営むことを不可能にするまでに極大化した人物として、多美を理解することができる。 ・多美の「死」への親和：他者によって現実の生に引き込まれることなく、自己意識の内部に閉鎖されて生きていられる、「死」と等価の静謐な状態にあることが、多美にとっての理想的な生であった。彼女はこのような「死」と生の統合を、現実の生活によって破壊されたと感じ取っているのである。こうした彼女の性情は、生活史によって形成されたものではなく、生来の「二重人」の一面である。 ・多美の「死」への志向とその精神の破局は、現代の世界のありかたが人間存在を危機に陥れるものであることを示すものと捉えることが可能ではないか。 ・多美の幻視が「原爆象徴」を想起させる光景として現出することは、彼女の「内面的主題」が、現実の生に適応できない個人の劇から、現代の人間存在のありかたを表象する問題へと提出する可能性を示しているのではないか。 ・自己にとっても他者にとっても、この世界は「地獄」としてあらわれる。そのことを彼女は告発する。彼女は個人の苦しみを人間の普遍的な問題に引き上げる。このことが、滅亡を自分個人ではなく世界全体の問題に転換する。 ・彼女の語りそのものが、「原爆象徴」によって仮構された幻視をとおして、自己の個人的な生の問題を、人間全体の存立にかかわる問題へと拡張しているのである。

12	リアリズムの共犯 福永武彦「世界の終り」における語りと構成をめぐって	木下幸太	明治大学大学院文学研究論集48	2018年	<p>13</p> <p>【論文要旨】の要約 「世界の終り」は同時代の仏文学(ヌーヴォーロマン)のミシェル・ピュートル『心変わり』の語りの技術を受容し、叙述形式の異なる二つのリアリズムを対置させる構成を取った。この形式を採用することで、既存のリアリズム(登場人物がみたそのままを語る形式)とは異なる方法で無意識や狂気をテキストに再現した。つまり、&lt;無意識&gt;や&lt;狂気&gt;を直接書き表さない=&lt;空白&gt;として示すという語りの方法や、語りの対置という構成によって表象しようとした実験作として評価できると結論づけた。</p> <p>(本文の要約)  <ul style="list-style-type: none"> <li>・ピュートルは『心変わり』(1957)で、従来の小説で一人称が用いられる個所に二人称「きみ」を用いた二人称小説という形式を採用した。本作の清水徹訳1959年刊行本には、福永の評が帯に添えられている。("伝統的なフランス心理小説の系列の上に立って、目ざましい実験を試みた『小説』である。"、"この第二人称という新しい形式に馴れさえすれば、これは少しも難解でない興味津々たる物語である。")</li> <li>・多美の一人称での語りの中で二人称を用いることで擬似的な無意識を表象したのだろう。</li> <li>・多美の語りには忘却された記憶の徴候が書き込まれていて、内的独白には浮上しない&lt;空白&gt;(無意識)が暗に示されている。「夕焼け」「地獄」:赤、血、流動体のイメージより、忘却されて&lt;空白&gt;となったトラウマ化した記憶とは、流産という出来事であり、多美は「世界の終り」を語ることを通して、「何かが死」んでしまった(喪失した)自身の身体と、トラウマ化した記憶を語り直そうとする。</li> </ul> </p> <p>(【おわりに】より引用) 「世界の終り」は同時代のフランス文学を受容し、叙述形式の異なる二つのリアリズムを対置させることによって、既存のリアリズムとは異なる方法で無意識や狂気をテキストに再現しようとした点で、単に受容した作品の模倣・反復に終わらなかった実験作と言える。そして、&lt;空白&gt;を示すという語りの方法や、語りの対置という構成によって、語る主体の&lt;無意識&gt;や&lt;狂気&gt;が表象可能であると示した点でも評価されるテキストである。</p>
----	---------------------------------------	------	-----------------	-------	---